

1. 活動日程・会場

2016年6月4日～2016年6月11日

National Research Council (イタリア・ローマ)

2. 活動の目的

本研究は、コミュニティにみられる特徴やよいとされている物事を抽出し、コミュニティの内部で共有するための言語をつくる試みである。今回の活動では、イタリアで開催される Collaborative Innovation Networks 2016 (COINs16)という国際学会にて、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) における「SFC Culture Language」の事例を取り上げ、英語論文およびプレゼンテーションによって発表した。この発表を通じて各国の様々な分野から参加している研究者より講評や具体的なアドバイスを得て、本研究における試みの有用性や今後の展開を模索することを目的とした。

3. 活動の成果

今回の活動は、コミュニティの内部における共通言語をつくる試みであるコミュニティ・ランゲージの事例を紹介し、多分野の研究者からのフィードバックを得ることを主眼としていた。学会への参加を通じ、2つの知見を得ることができた。

- (1) パターン・ランゲージとの差異についてより深く思考するきっかけが得られた
「SFC Culture Language」はパターン・ランゲージの方法を応用して作成したものであるため、プロセスにおいて類似点がみられる。しかし、パターン・ランゲージのように解決すべき問題を記述するのではなく、主に観察される現象を取り上げて抽象化しているため、作成される語はパターンほど具体的ではない。今回参加した学会にはパターン・ランゲージを専門としている参加者がいなかったため、プロセスだけではなく完成した語についてもパターン・ランゲージとの対比を強調して伝えたり、深く記述したりする必要があることを実感した。
- (2) コミュニティらしさを共有し、コミュニティを再生産することの意義を再確認することができた
コラボレーションを共通のテーマとしている COINs という学会において、コミュニティ・ランゲージの手法を紹介することで、コミュニティの捉え方に新たな視点を取り入れることにつながったと考えている。SFC25 周年式典において「SFC Culture Language」の冊子を配布した際に企業の方から社史をつくる方法として取り入れたいとの声をいただいていたが、学会参加者からも企業理念の共有方法として興味をもっていただいた。コミュニティらしさの再確認や継承を支援したり、コミュニティ内のコラボレーションを援助したりする方法として有

用な手法であり、日本のみならず海外においても需要があることが期待できるコメントが得られた。



【COINs16 における口頭発表の様子】

4. 今後の活動

今回提出した論文は、Springer から出版されている『Springer Proceedings in Complexity』シリーズに掲載されて出版されるため、より広い範囲にコミュニティ・ランゲージの試みが認知されることが期待できる。また、「SFC Culture Language」の冊子は新入生に対して配布されたり、オープン・キャンパスで SFC についての説明する際にも使用されたりしているため、活用方法についての検証も行っていきたいと考えている。さらに、SFC だけではなく、他の大学や企業をはじめとしたコミュニティにおけるコミュニティ・ランゲージの作成も視野にいれていきたい。

5. 謝辞

ご指導いただいた井庭崇准教授をはじめ、井庭研究室のメンバーや「SFC Culture Language」の作成にご協力いただいた SFC 関係者のみなさま、そして学会への参加にあたり資金面での援助をいただいた湘南藤沢学会に心よりお礼申し上げます。